

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第68号

平成30年5月8日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

90歳の長寿を生き、9代の南北両朝に仕えた宣房

藤房は後醍醐帝に諫言するも聞き入れられず出家

藤原宣房・藤房父子について

今月は、後醍醐天皇に仕えた藤原（万里小路）宣房と藤房親子を取り上げました。

藤原鎌足を始祖として、不比等と続いた藤原家は、不比等の4人の息子によって、武智麻呂（南家）、房前（北家）、宇合（式家）、朝呂（京家）の4家に分かれます。



万里小路藤房卿（東京 万里小路家蔵）

そして北家の系譜の中で、鎌足から数えて21代目に当たる資通を家祖として万里小路家を名乗り、宣房、藤房と引き継がれます。代々宮中において、学問の一家として天皇に仕えました。

父宣房は、正嘉2年1258生れで、正平3年1348に没するまで90歳の長寿を生き抜いた公家で、亀山、後宇多、伏見、後伏見、後二条、花園、後醍醐、光源、光明の南北両朝の天皇に仕え、従一位大納言まで上り詰めた人物です。

また藤房は、永仁4年1296生れで、花園、後醍醐天皇に仕え、正二位中納言まで上がった人物で、晩年、後醍醐天皇の政治に諫言・苦言を呈するも聞き入れられず、突然出家をしてまわりを驚かせました。また、日本三忠臣といえば、楠木正成、平重盛、藤原藤房の三人ですが、藤房に関する歴史的資料が少なく、その人物像は定かではありません。

写真：松野睦夫著「南朝の忠臣万里小路藤房卿」掲載より転載

弁明の使者として鎌倉へ行った宣房

宣房については、正中の変の折、後醍醐天皇の弁明の使者として鎌倉に派遣された件がよく知られています。

人物叢書「金沢貞頭」（永井晋著）によると、「正中の変」の件に、宣房が使者として派遣された様子について、以下の通り載っています。

●正中の変

9月19日、後醍醐天皇の討幕計画が露見した。

六波羅探題北条範貞は、関東申次（もうしつぎ）西園寺実衝の北山邸に小田時知と二階堂行兼を派遣して民部卿日野資朝と少納言日野俊基の引き渡しを求め、また小串範行と山本時綱を派遣して討幕計画に与した土岐頼員（よりかず）と多治見国長を討った。六波羅探題の使者が鎌倉に到着したのは、9月23日の事である。

10月1日、六波羅の訊問に、日野資朝が白状したことが伝えられた。

この事態を受けて、後醍醐天皇は10月5日に万里小路宣房を弁明の使者として鎌倉に派遣した。京都の人々は宣房の鎌倉下向を忠臣として褒めそやしたが、鎌倉では安達時頭・長崎高綱の訊問に困惑することも多く、安達時頭を恐れる様は嘲弄を招いたという（「花園天皇宸記」）。

扇谷の記憶では、最初、後醍醐天皇の使者として高飛車な交渉を目論んだ宣房であったが、鎌倉では、主客転倒し、座敷を転がり、下座にひれ伏したドラマのシーンが脳裏に残っています。

しかし、公家としては優秀であったようで、南朝・北朝の多くの天皇に仕えた宣房でした。

元弘の変における後醍醐天皇の挙兵時には、8月24日の御所脱出の翌日、8月25日には早くも宣房は六波羅探題に捕縛をされています。

公家としては優秀であったようですが、主人と決めた

天皇にとことん仕えるといった気概には欠けていたようです。その点、息子の藤房は違いました。

太平記『駿馬献上のこと』の藤房

藤房の人となりをよく表しているのが、太平記巻第一三『駿馬献上のこと』です。

「完訳太平記」（勉誠出版）から該当する件の要約を転載します。

首までの高さが4尺3寸ある月毛の駿馬が佐々木塩谷判官高貞から帝に献上された。

洞院公賢は、「何にも勝る瑞祥でございます。この駿馬が現れたことは、仏法と帝の政治や法が栄え、皇位は長久であるとの喜ばしい前兆でございます。」と、吉兆と答えた。

しかし、萬里小路藤房は、

「これは決して吉事ではありません。

今は、大乱の後で民は貧窮し、誰もが苦しんでおり、天下はまだ平穩ではありません。

「史記」に言うように、^①政治に携わる者はたとえ食事中で口の中に食べものがあるうと、それを吐き出しても先に人の訴えを聞き、帝に誤りがある時、臣下は帝に文書をたてまつってそれをお諫めすべきです。しかし、諸役人は楽しみにふけるばかりです。

世の中が静まった今、^②手柄を立て、恩賞を望む武者たちが幾千万ともみせず存在するのです。ところが、公家や官職にある人以外はまだ恩賞を賜った者はいません。

まず武士たちの勲功に報いてその恨みを解消すべき所を、^③何よりも大内裏の造営が必要だとして、諸国の地頭から収益の二十分の一を徴収なさったりすれば、戦乱で出費が大きかった上にこの課税で、さぞや嘆いておられます。

また、^④諸国では守護が威力を失い、国司が権力を強めています。官職もない、身分の低い代官などが荘園を横領し、度を超えた勢力を持つようになっています。

長年にわたって定着している武家の名称である諸国の^⑤御家人の称号を廃止なさいましたので、早くも大名や高家といった名門までもが平民同様です。

恩賞を与えるのなら皆に等しく与え、官位も同じにすべきを、^⑥赤松円心だけはわずかにもとからの所領一か所の存続をお認めになったのみで、恩賞として守護に任じてお与えになった国を召し返されたとは、その答はいったい何なのでございますか。

手柄にふさわしい恩賞が与えられれば、忠義の志あるものが増え、罪にふさわしい跋を与えれば、罪を犯す者は減ると申します。嘆かわしいことです。

・・・今はただ珍しいものをもてあそぶのはおやめになって、仁政の恩恵を世に広められるのが何よりでございます。」と、凶兆と答えた。

藤房はその後も諫言し続けたが、遂に後醍醐天皇はそ

れを聞き入れようとせず、大内裏造営の計画を中止することもなかった。

藤房は、「わたしとしては臣下たる者の道を尽くした。今となつては身を退けるに越したことはない」と、意を決した（出家する）。

後醍醐帝の命（藤房を呼び戻せ）を受け、宣房は藤房の下を泣きながら訪ねた。

宣房が悲嘆の涙を押こらえて藤房が泊まっていた庵室へ行ってみると、誰に読ませようと思って書き残したのか、破れた障子の上に歌を一首残してあった。

位み捨つる 山を憂き世の 人阿わば 嵐や庭の 松にこたえん

（私が立ち去ろうとしているこの僧坊を憂き世の人が訪ねてくれば、吹き渡る風が庭の松を鳴らして答えるばかりでしょう。）

また、^{きおんにんむい しんじつほうおんしゃ}「棄恩人無為、真実報恩者」（五山文学の詩）

^{じょうわるいじゅうそえんれんぼう げ}人義堂周信編纂の『貞和類聚祖苑聯芳集』にある偈文で、恩ある人を見捨てて出家するという事は、真実を以って恩に報いるという事だ、の意」という文の下に、

白頭^{シテ}望^ミ 断万重山

^{ばんちよう}白頭にして望み絶つ番 重の山

曠劫^ノ恩波^{尽シテ}底^ヲ 乾ク

^{こうごう}曠劫の音波底を尽くして乾く

不^ニ是胸中^ニ蔵^ス アラ 五逆^ヲ

^{かく}これ胸中に五逆を蔵すにあらず

出家端的^ニ報^ズルト 親^ニ難^シ

出家端的に親に報ずること難し

（白髪頭の年になって、宮中での望みは絶った。底の地面まであらわにして波が引いていくように、廣大無辺の親の恩を顧みることなく去っていく。これは胸中に主人や親に対する反逆臣を隠し持っているからではない。しかし、出家するこの気持ちを明確に親に告げることは難しい。）

と、唐の黄檗禅師が、あとを追う母親が川でおぼれているのを見捨てて出家した、という大義の渡りと題する、仏を讃えた古い詩の一節を書いてあった。

宣房はそれを読んで、これではたとえどこの山に居ようと、藤房に生きて再会することはできまいと、息子を失った悲しみの涙にむせんで、空しく京へ帰って行ったのだった。

正成同様、帝に諫言をする人

藤房が正成同様三忠臣の一人とされる理由が、この件に見て取れるのではないだろうか。

（文責「四條畷補正行の会」代表 扇谷昭）